

歌のよしあし 田中拓也

高校の古典の授業で扱う定番教材の一つに源俊賴の歌論書『俊賴髓腦』の中の「歌のよしあし」という一文がある。「歌のよしあし」を知らむことは、ことのほかのためしなめり（訳 歌の優劣を決めることは格別難しい試みであるようだ。）で始まる本文は、藤原定賴が父親の藤原公任に「和泉式部と赤染衛門のどちらが優れているか。」と質問する場面から始まる。その中で、公任と定賴は次の二首の「歌のよしあし」について議論する。

・津の国のこやとも人のいふべきにひまこそなけれ 芦の八重葺
・暗きより暗き道にぞ入りぬべき遥かに照らせ山の端の月

前者は公任が和泉式部のことを「いとやむごとなき歌よみなり」と評価する根拠とした歌であり、後者は定賴が「よき歌とは、世の人申すめれ」と述べ、当時の人々が高く評価していた歌である。本文中では公任が論理的に前者の作品の素晴らしさを説くのだが、約千年経過した現時点では大半の人が後者を和泉式部の代表歌として愛唱していると言えるだろう。

このエピソードはつくづく「歌のよしあし」を決めることの難しさを伝えているように思う。ある歌会では高く評価された作品が別の場では酷評される。自分がいいと思った歌が他人から否定される。そんなことは短歌界ではありふれた場面として遭遇することと思う。これはスポーツや商売などでは起こり得ないだろう。

スポーツは勝敗が明確に出るものであるし、商売も収益という明確な結果が出るからである。

では、短歌の場合はどうだろうか。確かに歌会で票の入る歌や入らない歌はある。歌集として売れる歌集と売れない歌集があるのも事実である。だが、それはそのまま「歌のよしあし」に繋がるのだろうか。

短歌の賞の選考会において選考委員間で意見が割れることはしばしばある。歌を読んだ時に「表現の新しさ」を重視するのか、「主題の独自性」を重視するのか。「定型のリズム」を重視するのか「修辞の巧みさ」を重視するのか。「文法や用字の正しさ」を重視するのか「言葉の冒險」を重視するのか。「時代性」を重視するのか「普遍性」を重視するのか。挙げていけばきりがなく、ある。理屈ではなく「いい歌はいいんだ」と自身の「勘」で読む歌人もいる。しかし、突出した素晴らしい「勘」の持ち主もいれば、そうでない場合もある。本当に「歌のよしあし」を知らむことは、ことのほかのためしなめりである。おそらく、この「歌のよしあし」に明確な答えはないと思う。だが、古人の歌に関する言葉を読んでいくとヒントは見えてくるように思う。

・よしとも覚えぬ我が歌を、人に語りて、人のほめなどしたる由いふも、かたはらいたし。
(清少納言『枕草子』)

・自作は善し悪し尤も弁へ難き事なり。
(藤原清輔『袋草子』)

自分で詠んだ歌が良く思えるのはいつの時代も同じことである。お互いに歌を批評し合うところから「歌のよしあし」の規準を作り上げていくほかないのではないだろうか。